

# 博士学位請求論文審査報告

2018年3月14日

申請者 山田由佳子

論文題目 二つの世界大戦と傷ついた身体イメージ  
—キュビズム、シュルレアリスム、アンフォルメル

審査委員 鵜飼哲 喜多崎親 香川檀

## 1 本論文の構成

本論文は第一次および第二次世界大戦の惨禍が同時代の美術史に与えた影響を、キュビズム、シュルレアリスム、アンフォルメルというモダニズムの代表的な前衛絵画潮流の意味を再考し、主題と形式の二分法を超える独自のアプローチを採用することで究明することを試みた二十世紀美術史研究である。

本論文は以下の各章から構成される。

序論

本研究の狙いと先行研究

第1部

第一次世界大戦下の解体される身体表象

—キュビズムとシュルレアリスムによる応答

第1章 第一次世界大戦期とフランス美術

1-1. 第一次世界大戦と戦場の様子

1-2. 戦場とイメージ

第2章 キュビズムと兵士の身体 — フェルナン・レジェの《トランプ遊び》

2-1. 戦場でのデッサン

2-2. 兵士の身体表象

2-3. 《トランプ遊び》における画家と絵画の関係

## 2.4. 死とトランプ遊び—セザンヌとレジェ

### 第3章 シュルレアリスムの絵画における身体—切断と縫合の美学

- 3-1. 第一次世界大戦後のフランスと身体イメージ
- 3-2. 第一次世界大戦とシュルレアリスムの誕生
- 3-3. シュルレアリスムにおける身体の断片化—男性兵士の不安と主体性の解体
- 3-4. ヴァル・ド・グラース陸軍病院とシュルレアリスム
  - (1) 負傷と治癒の物語への抵抗
  - (2) 断片化された身体とコラージュ

## 第2部

### 占領の経験と絵画

### 第4章 第二次世界大戦期の身体表象

- 4-1. 第二次世界大戦の始まり
- 4-2. 迫害されたアーティスト
  - (1) ヴォルス、マックス・エルンスト、ハンス・ベルメール
  - (2) ボリス・タスリツキーの絵画におけるブーヘンヴァルト収容所の記憶の表象
- 4-3. フランシス・グリュベールの《ジャック・カロへのオマージュ》(1942年)における女性の身体

### 第5章 ジャン・フォートリエの「人質」の連作における傷ついた身体

- 5-1. 「人質」の連作誕生と発表
  - (1) 占領期の制作
  - (2) 1945年10月の発表と当時の反応
- 5-2. 「人質」の連作前史
  - (1) 初期フォートリエの絵画作品
  - (2) 「厚塗り」の絵画の誕生
- 5-3. 顔の表象と連作による意味付け
- 5-4. 複製と増殖、そしてヴェロニカの聖顔布

### 第6章 オリヴィエ・ドゥブレの初期抽象絵画と戦争

- 6-1. ドゥブレ初期の作品
- 6-2. 黒い線と死者—ダッハウからパリへ、線と点による死者の想起
- 6-3. シーニュと反復
- 6-4. 身体としての絵画

## 結び

## 主要参考文献

## 図版

### 2 本論文の概要

本論文は 20 世紀前半のフランス絵画史において新たな造形上の展開を示したキュビズム、シュルレアリスム、アンフォルメルという 3 つの前衛絵画潮流に分類される諸作品の研究を通じて、戦争で傷ついた身体像の歴史を再検討することを目的とする。キュビズムとシュルレアリスムをフランスにおける第一次世界大戦期とその後のヨーロッパにおける重要な美学的展開と捉え、アンフォルメルを第二次世界大戦以降の造形芸術の新しい傾向として把握すると同時に、キュビズムとシュルレアリスムが示した視覚芸術上の達成が、第二次世界大戦期における身体像の形成、新たな造形言語の生成に、どのように寄与したのかも併せて検討の対象となる。

20 世紀前半の戦争との関連で制作された作品の調査研究が進められてきた 1980 年代以降の研究動向のなかで、従来の研究では作品相互の関係性が分析されるとともに特定の政治的、社会的文脈のなかに作品を位置付ける作業が行われてきた。しかし、造形上の分析が十分になされてきたとは言い難い。また多くの研究が一次大戦と二次大戦のいずれかに焦点を当てており、1910 年代から 20 年代の造形芸術と 1940 年代のそれとの連続性と差異に関してはあまり注目されてこなかった。

本論文では二度の世界大戦という惨禍に直面したモダニズムの画家たちが、自らの造形上の探求と実験に取り組みながら、独自の身体像をどのように作り上げていったのかに焦点が当てられる。人間の身体が 20 世紀にかつてない変質を経験したとすれば、戦争による暴力はこの変質を決定的に方向づけたのであり、個々の画家による創作は身体の変質というこの文化的事象に対する応答とみなしうる。

序論では一次大戦期および二次大戦期におけるヨーロッパ美術を扱った研究書および展覧会カタログが紹介されるとともに、美術史研究における本論文の位置づけが提示される。

以降の章は時代区分に従い 2 部構成となる。

第 1 部では一次大戦で損傷した身体の様相が考察される。第 1 章ではアンリ・バルビュスの小説『砲火』を手がかりに、戦場で兵士の身体がどのような状況に晒されていたのかが確認されるとともに、戦場に赴いた画家たちの作品が概観される。

第 2 章ではフェルナン・レジェ (Fernand Léger 1881-1955) の《トランプ遊び》における兵士の身体表相に即して具体的な作品分析が展開される。1907 年にポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-1906) の芸術を知り、1908 年から 1909 年にかけてパブロ・ピカソ (Pablo Picasso 1881-1973) とジョルジュ・ブラック (Georges Braque 1882-1963) が創始したキュビズムに触れたレジェは、イタリア未来派が提唱した美学や同派の代表的画家であるジーノ・セヴェリーニ (Gino Severini 1883-1966) の身体表現も吸収しつつ、「形態のコントラスト」のシリーズ (1913-1914 年) が示すように、一次大戦前は楕円形や円

筒形がダイナミックにぶつかり合いながら組み合わせる独自のキュビズム絵画を作り上げていた。兵士として戦地に赴いたレジエは、戦場での生活や目に触れたものごとを積極的にデッサンした。それらのデッサンをもとに制作された《トランプ遊び》(1917年)では、戦前のスタイルを基盤としながら、当時流行し始めていた芸術作品の制作を機械生産に譬える発想に共鳴し、戦場もしくは軍事病院で目にする兵士の身体像をキュビズムのスタイルで描き出した。著者はレジエが、形象の解体と再構成を行うキュビズムのスタイルで、傷を負った兵士、最新の医学によって不完全に再生される兵士の身体を表象することによって、絵画制作と現実の兵士の身体の破壊と再生の間に、平行的な関係を構築していたと主張する。また、レジエの《トランプ遊び》がセザンヌの「カード遊びをする人々」の連作へのオマージュとなっていることに注目し、セザンヌの作品同様、「ヴァニタス画」のイメージと結びつきつつ、「死の暗示」を漂わせていることを強調する。

第3章では一次大戦の経験から誕生したシュルレアリスムの作品に見られる身体像が検討される。まず、レジエの《トランプ遊び》で描かれた負傷兵の身体の破壊と再生のプロセスが、シュルレアリスムの美学においても重要な意味を持っていたことが確認される。シュルレアリストの諸作品は「秩序への回帰」を示す戦後の傾向と批判的に対峙し、夢や不合理、非現実的な幻想世界を示すイメージを提示した。その運動の起源には戦争への抵抗を示す国際的な芸術運動として展開されたダダがあったこと、またアンドレ・マッソン (André Masson 1896-1987) やドイツ出身のマックス・エルンスト (Max Ernst 1891-1976) から戦場に赴いた画家たちもまた、破壊されてゆく男性身体への深い考察を作品に反映していたことが想起される。そしてアンドレ・ブルトン (André Breton 1896-1966)、ルイ・アラゴン (Louis Aragon 1897-1982) というシュルレアリスム運動の二人の創始者が、傷痍軍人の療養施設であり負傷した身体の再生プロセスとその有効性を提示するべき場でもあったヴァル・ド・グラース陸軍病院に勤務していた事情が詳説される。

第2部では二次大戦におけるフランス敗北後の、ドイツ占領期の作品が検討される。

第4章ではまず、二次大戦開戦とともにフランスが置かれた状況が記述される。「敵国外国人」として収容所に送られ、後年アンフォルメル画家の一人と位置付けられることになるヴォルス (Wols 1913-1951)、一次大戦後にシュルレアリスム絵画の展開におい

て重要な役割を担ったマックス・エルンスト (Max Ernst 1891-1976)、同じくシュルレア

リスム運動に参加したハンス・ベルメール (Hans Bellmer 1902-1975) の作品に見られる人間身体の表象方法の変化が検討される。さらにリアリズムの画家ボリス・タスリツキー (Boris Taslitzky 1911-2005) が収容所を後にしてからもその光景を作品化し続けたことの意味が、キャシー・カールスのトラウマ理論を参照して考察される。またフランシス・グリュベール (Francis Gruber 1912-1948) の作品では、パリに留まった画家が、女性に「国家の母」としての健康的な身体が求められた時代に、女性を死や病と接近させることで、ヴィシー政府によって否定された「共和国」の政治的状況を描き出していたことが指摘される。

第5章では、第4章で検討された美術家とさらに異なるアプローチによって、また一次大戦後の前衛画家たちとも異なる絵画言語に訴えて、戦争の極限的な暴力に晒された身体と向き合い作品を制作した画家としてジャン・フォートリエ (Jean Fautrier 1898-1964) が取り上げられる。画家が1942年から1945年の間に制作したとされる「人質」の連作について、この章の前半では連作が描かれた状況が検討され、続いて1945年にルネ・ドゥルーアン画廊で発表された際の反応の数々が整理される。そのためまず、両大戦間期のフォートリエの作品を時系列で辿りながら、「人質」の連作に至る画家の軌跡が想起される。

「人質」という連作のタイトルは、当時の政治的文脈では、すでに収容所に拘束されていて、対独抵抗派の作戦行動に対する報復のため、ドイツ軍に身代わり、見せしめとして処刑された人々を参照していた。しかし、フォートリエの連作は、こうした文脈的意味と同等あるいはそれ以上に、この主題に向き合うために画家が採用したスタイルによっても、発表当時から注目を集めていた。画家はカンヴァスを机に水平に置いてその上に紙を貼り、粘着性の強い白っぽい絵具 (スペイン白) を塗ることで下地を作り、それから「地塗り塗料 (enduit)」が乾かないうちに粉末状のパステルを用いて着色し、イメージを浮き上がらせるためにパレットナイフなどで線を引いた。出来上がった絵画ではマチエールが強調され、画家の手の痕跡が生々しく残っていた。著者はこの制作過程の緻密な分析を提示する。

第5章の後半ではフランシス・ポンジュ (Francis Ponge 1899-1988)、アンドレ・マルロー (André Malraux 1901-1976) などの文学者がフォートリエ作品について残した論評を手がかりに、画家が1940年代前半に油彩だけでなく版画によっても「人質」の顔のイメージを多数生み出していたことが注目され、そのことがナチスの暴力の性格とどのように関わっていたのかが考察される。とりわけポンジュが指摘したヴェロニカの聖顔布との類比が詳細に検討される。

第6章では、フォートリエの「人質」の連作に続く「傷ついた身体像」の美術史に独特の位置を占めるオリヴィエ・ドゥブレ (Olivier Debré 1920-1999) の作品群が扱われる。画家がダッハウ収容所やナチスの被害者および加害者を参照するタイトルを与えた一連の抽象絵画は、批評家のアントニオ・タピエによってアンフォルメルに分類されたことはなかったが、アンフォルメルの画家であるハンス・ハルトゥング (Hans Hartung 1904-1989) やニコラ・ド・スタール (Nicolas de Staël 1914-1955) とともに、抒情的抽象の系譜に属するとみなされてきた。とりわけ1940年代の中頃の作品では物質性が強調され、フォートリエに近い絵画言語が認められる。

フォートリエとドゥブレは1940年代前半のヴィシー期に、パリがドイツ占領下にあった時代にレジスタンスの政治的立場を選び取った点で共通しており、ともに戦争の犠牲者や死者をテーマとした絵画を制作した。エリック・ド・シャセイはこの二人の画家の作品について、戦時下のトラウマが、伝統的な証言の概念が依拠してきた表象の原理を根本的に不適切にしてしまう地点から出発しなくてはならなかった点で共通しているとみる。フォートリエの「人質」の連作では抽象化された顔や四肢を欠いた身体像が描かれる一方、絵画表面のマチエールが強調され、タイトルがなければその作品から主題を理解することは容易ではない。ドゥブレについても同様に、単純な円や線が描かれるそ

の作品に「死者とその魂」「ダッハウの死者」などというタイトルが付されていないならば、戦争や遭難した人間を想起するのは難しい。著者はドゥブレが抽象絵画を制作するにあたりピカソの具象作品から受けた逆説的な影響を強調し、ドゥブレが自らの絵画言語を作り上げる過程でピカソから学んだものを仔細に検討する。そして最後にドゥブレの作品の物質性に光を当て、フォートリエとの共通性を形態上の類似に求めるのではなく、ドゥブレの絵画がフォートリエ以上に具象的なイメージを徹底的に排除することによって絵画の物質性を先鋭に主張し、戦争における死者をテーマとしながら「読まれる」絵画であることを回避しようとした点にあると主張する。

結びでは本論文の作業内容と到達地点が簡潔に示されたのち、いくつかの今後の課題が掲げられる。一つは作業を二つの大戦期に限定したために組み込まれなかった 1930 年代、とりわけスペイン内戦を背景とした作品群の検討であり、もう一つはシュルレアリスムに属する個々の画家たちの作品のより詳細な検討である。それらの不足を認めたとえ、戦争で傷ついた身体の表象と二十世紀絵画の関係に取り組んだ本論文の意義が、最後にあらためて確認される。

### 3 本論文の成果と問題点

本論文の成果としては以下の点が挙げられる。

第一に本論文が 20 世紀の二つの世界大戦を射程に収めて「戦争と美術」の関係を論じるきわめて独創的な研究であることである。モダニズム美術における断片化や抽象などフォルム（絵画言語）の展開は、美術の自律的な発展の結果だけであったのではなく、現実の暴力への画家たちの応答でもあったという、ここ 30 年来の新しい美術研究の動向を踏まえたものである。本論文のテーマである身体像の分析が大きな意味をもっているのは、西洋美術の伝統においてそれが世界の認識と深く関わってきたからである。身体の統一性の表象は、統一的な世界像を組織し認識する人間の能力の証左でもあった。それが、20 世紀において不可能となってきたことを、この研究は巧みにあぶりだしている。

第二に、美術作品が個別の対象の表象を超えて、それらがそこから生まれた二つの戦争の、固有の性格の反映でもあることを論証したことである。本論文の構成は第一部のレジェから第二部のフォートリエへという軸線で読むことができ、それはすなわち一次大戦とキュビズム（対象の破壊と再構築、統一性の喪失）から、二次大戦とアンフォルメル（苦痛の象形文字、具象性の喪失）へ、という大きな流れを示している。この背景には「前線体験から占領体験へ」という戦争の経験の軸の変化があり、その結果、一次大戦期には前線で画家が目撃した光景との類似（つまり再現描写）において身体を表象したのに対し、より隠然たる抑圧があったナチス・ドイツによる占領下のフランスではそれがもはや不可能となり、一種の表象不可能性としてのアンフォルメルへと変貌したと解釈できる。

第三に、キュビズム、シュルレアリスム、アンフォルメルという 20 世紀前半のフランスの重要な前衛絵画潮流を横断的に再考する新たな視点が提示されており、単なるフォーマリズム批判でもコンテクスト主義でもなく、新しい様式が主題と如何に切り結ぶかが明らかにされている点で、二十世紀美術史研究への貴重な貢献となっている。

とは言え、本論文にはいくつか不十分な点も認められる。

第一に、参照した先行研究に十分な検証を行うことなく依拠した例がいくつか見られることである。例えばブルトンにおけるマスクに関する言及を論じた箇所、デスマスクの伝統以外にヴァル・ド・グラス陸軍病院での経験との関連が指摘されているが、先行研究の記述の妥当性が適切な検証を受けているとは言い難い。また、画家タスリツキーがドイツの収容所から解放されてフランスに戻ってのち、施設のなかで見た光景と腐敗する肉体を繰り返し描いていることについて、キャシー・カルースのトラウマ理論を援用して説明しているが、カルースのいうトラウマは、本来、無意識的に回帰するものを指しており、タスリツキーが意識的に取り組んでいく制作について、この概念を適用することは妥当性に欠ける。さらに、フォートリエの連作《人質》について、顔を具象的に描いた作品と何を描いたか判然としない抽象的な作品とが混在する点に関して、「戦争のトラウマを想起させる」という参照文献の文言がそのまま引かれているが、具象と抽象の混在がなぜトラウマ記憶と言えるのか、もうひとつ踏み込んだ説明が必要であろう。

第二に、表現の主体である画家と「傷ついた身体」イメージとの関係について、画家グリュベールの描いた女性像に関する解釈はやや脆弱である。レジェは兵士（男性身体）を支配と同一化の両義性をもって描き、シュルレアリストのマッソンは男性身体を断片化された曖昧な形態に描き、戦闘的な男らしい身体像に対抗した。一方シュルレアリストは女性身体を断片化して描き、他者の身体を侵すことで自らの安定性をはかるファシストとの共犯性もあると指摘される。これらの表現主体とイメージとの関係と対比的に本論文で評価されるグリュベールだが、彼が絵画のなかで女性を、男性的ナチス・ドイツに陵辱された女性的フランスとして描いたのは、男性の所有する「国土と女たち」という根本的な見方を前提しており、ナチスやペタン主義者がモデルとして掲げた祖国の再生と豊穡のアレゴリーとしての女性像と同根のものではないかという疑いが残る。

第三に、参照文献、とりわけマルロー、ポーラン、ポンジュ等、文学者による論評の翻訳には問題のある箇所が散見される。また、図版の提示の仕方にも補完・修正・整理を要する部分がある。

とはいえこれらの問題点は今後の研究の発展のために指摘しなければならないものであり、本論文が豊富な資料・文献調査に基づき、重厚な論述を通して遂行された貴重な研究であることを否定するものではない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

## 最終試験結果要旨

2018年 3月14日

受験者                    山田由佳子  
最終試験委員        鵜飼哲 喜多崎親 香川檀

2018年2月28日、学位請求論文提出者 山田由佳子氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「二つの世界大戦と傷ついた身体のイメージ—キュビズム、シュルレアリスム、アンフォルメル」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、山田由佳子氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、山田由佳子氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。